

総 説

ジャーネーの心理学と社会的人格論の現代的意義

大 羽 蓁

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 臨床心理学科

(平成 7 年 4 月 19 日受理)

Contemporary Significance of Janet's Psychology and His Social Personality Theory.

Shigeru OBA

*Department of Clinical Psychology
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-01, Japan
(Accepted Apr. 19, 1995)*

Key words : social personality, Janet's psychology, social feeling,
history of psychology

Abstract

Janet's psychology and his social personality theory were reviewed. Personality is the social product, and the starting point of the social personality is the development of the basic feelings. The importance of Janet's view in the contemporary psychology was discussed.

要 約

ジャーネーの心理学とその社会的人格論が再評価された。人格は社会的産物であり、社会的人格の出発点は感情の発達である。現代心理学におけるジャーネーの見解の重要性が論議された。

はじめに

学術研究、特に自然科学の研究では専門をきわめることに熱心であることから、各学問は細分化され、その傾向はますます顕著なものとな

っている。元来、科学研究においては、暗黙の予定調和の思想があり、人々が無関係な分野の研究をしていても科学全体は進歩すると考える楽観主義が存在した。その点は今日の心理学の諸分野の研究についても言えることである。

例えば、大別して実験心理学と臨床心理学はそれぞれ互いに無関心を装い、互いに無視しあっているようにさえ見える。これは現代日本における注意すべき状況であると思う。心理学には、人間の精神生活についての体系的かつ総合的な理解が不可欠であるにもかかわらず、実験家は外見的行動と統計処理に没頭し、他方臨床家もテストの解釈やケースの表面的叙述に終始する傾向が多いように思われる。

このような状況を反省する意味から、本論文では心理学の拠るべき一つの理論を「19世紀に重要な心理学的研究を発表したほとんど最後のフランス人」(Boring)¹⁾といわれるジャンネーに求め、再評価を加えることにする。先ず背景としてフランス心理学の伝統について述べる。

フランス心理学の発展と伝統

今田²⁾によれば、近世心理学の根拠となったデカルトの心身二元論にもとづく理性主義心理学と、イギリス経験主義の影響によるコンディヤックの感覚主義の後には、フランスには特に見るべき心理学的発展はなかったが、催眠術が精神病学と結びつくに至って、具体的人間性の臨床的研究が著しく発達し、これがフランスの心理学の特色となった。すなわち独自の生理学的、精神医学的背景の中に、異常心理学とそれに基づく実験心理学とが起った。シャルコー、テーヌによってその道が拓かれ、リボーによって基礎が据られ、ビネー、ジャンネーによって一層具体的成果が上げられた。(なおテーヌはフランスにおける最後の哲学的心理学であり、ビネーは知能の測定についてよく知られている。その点からビネーは臨床心理学者と考えられがちであるが、本来実験的研究で貢献した。したがって両者ともここではとり上げない。)

フランスの心理学の特徴は異常心理学であるということはすでにふれたが、その確立に決定的に寄与した人はリボー (Theodule Armande Ribot, 1839—1916)である。ルシュラン³⁾の「心理学史」によれば、彼は医者ではなく哲学者であった。彼は自分で直接患者を観察できないことを残念に思い、哲学と医学を二重に会得することを弟子たちに要望したという。

彼は1885年にソルボンヌの実験心理学教授となり、1889年に彼のためにコレージュ・ド・フランスに設けられた「実験および比較心理学講座」の教授となったが、彼は医学書や精神病理学概論、その他いろいろな心理学者の著書の中に散在している臨床的諸観察の中に重要な事実を見出したのである。

このような伝統は、その弟子であり後継者であったピエール・ジャンネー (Pierre Marie Felix Janet, 1859—1947) に受けつがれた。

矢田部⁴⁾はその心理学序説の第二章第一節「情意生活の法則——諸機能の体統」において、この間の事情を次のように叙述している。

「フランス心理学の伝統においては早くから生活を段階的に見る思想が行われた。…リボーは動作の条件を性格と名づけたが、性格は進化的な産物であって、はじめは種族に共通する本能的な一般反応を行うに過ぎないが、それが漸次固体の特性を反映するようになり、またそこに意識を伴うに至って欲望を生じ、感情を生じる。この発達の最高段階にあるものが人間の意志であって、そこではあらゆる傾向が微妙なヒエラルキー的体制を構成している。然るに意志が病気になるとかかる体制の解体が起り、ジャクソンのいわゆる退行現象が起って、進化とは逆に高等な意志がまず失われ、欲望の喪失を通してついには自動機械に転落すると説いた。ピエール・ジャンネーにおける傾向のヒエラルキー的秩序の説はこれを更に精しくしたものである。…ジャンネーは人間の行為はこれら多くの傾向の体系であり、上級の傾向は下級の傾向を基礎として初めて成立可能となると考えた。而して精神的疾患においてはまず上級傾向から毀損される。すなわちこの上級下級の秩序は精神緊張の高さに相当するもので、傷害においては緊張は弛緩して下の段階に低落するものであると考えたのである。…」

すでにこのことを矢田部⁵⁾は精神活動論史としての「意志心理学史」の中で「傾向の段階的秩序——Pierre Janet (1859—1947)」と題して14頁にわたり詳しく述べ、次のように結んでいる。

「ジャンネーの傾向的秩序の思想はその根本においてはリボーのそれと異なるところがない。た

だ時代の推移はそこに著しい内容上の充実さを将来した。リボーはなお心理学を意識の学となし生理学的説明に希望をつないでいたが、ジャネーは心理学をもって人間の行為の学であるとし、その説明もまた純心理学的概念によるべきであって、生理学的概念の如きはむしろこれを避くべきであると主張した。行為の心理学とは行動の心理学の概念とは異り、言語およびその変形である思想をも行為のうちに数えるものであるという。…かくてジャネーにおいてフランス心理学はその伝統たる生物学、生理学、精神病学、社会学等の研究を総合統せる一つの具体的人間学を結実したといえることができるであろう。」

宮城⁶⁾はその心理学的自伝ともいべき著書の中で、1934年フランスに学んだくだりにおいて、当時を回顧し次のように述べている。「…ジャネーの講義は、ある程度わかりやすい心理学の話だし、ジャネーという名は昔から知られていたもので、いつも満員であった。そして実験心理学の研究もピエロンのもとに盛んではあったが、フランスの心理学の伝統はデュマやジャネーのような心理学であって「病理法」つまり病的なものを土台にして、ふつうの人の心理を研究する方法を用いたものであったし、人間全体に興味をもったものであった。」

このような理念は、宮城⁷⁾が以前からくりかえし述べていたことであるが、上述したフランス心理学の傾向を簡潔に表現したものといえよう。

ジャネーの略歴と学風

ピエール・ジャネーは1859年パリに生れ、パリで教育を受けた。1879年エコール・ノルマル入学、1882年哲学教授有資格者となり、ル・アブルのリセーで哲学を教えた。これは哲学者であった叔父ポール・ジャネーの影響による所が多いが、幼少期には植物学を好み、観察、分類の態度は、他の学問をするようになってからも持続し、彼の自然科学的傾向のもとになったという。更に彼には宗教的傾向があり、それは18歳の頃最もいちじるしかった。彼は自分の内にある自然科学的・実証的傾向と宗教的・神秘的傾向を調和させるべく哲学に赴く。同時に

医学面では幻覚に興味をもち病院で催眠の研究も続けた。

1890年、シャルコーに招かれ、サルペトリエール精神病院の心理学実験室の主任となる。1895年ソルボンヌの教授となり実験心理学の講座を担当。1902年コレージュ・ド・フランスの教授となり、1936年までその職にあった。ルシュランによれば、彼の講義は常に潑刺とした興味をよびおこさずにはいなかった。そして彼の説明は、その質とともに思想の深遠な獨創性によって聴く人すべてを感動させたという。

外林他⁸⁾はジャネーについて次のような解説をしている。すなわちジャネーの研究で有名なのはヒステリーと多重人格であるが、精神や人格の本質的な姿は総合と分化の力にあり、この力によって人間の人格の要素は調和のとれた統一体を形成できる。すなわち総合の力が弱まれば、人格は分断され、精神の分裂を生じ、神経症的な症状や精神病的な徴候を示すようになる。そこで種々の人格の要素が総合され、バランスを保つ力を表現するために緊張という動的概念が用いられた。精神の健康は緊張状態に依存するものである。そしてこれらのことを含めて「…彼は精神病学を通じて心理学を、心理学を通じて精神病学をみのり豊かなものにしようとし、心理療法に健全な心理学的基礎を与えようと努力した臨床心理学者の最初のひとりである」と評している。この紹介は、上述の矢田部の叙述には及ばないが、心理学を学ぶ現代の研究者には比較的便利な解説であろう。なお、ジャネーとその業績の詳細な研究として Henri Ey の論文⁹⁾が最も包括的なものとして注目されるが、ここでは参考までに上げておく。また荻野¹⁰⁾による精神医学事典の解説は最もよくまとめられているので特筆しておく。同様に宮城¹¹⁾の解説もすぐれている。

同時代の学問的交流

ところで時代の影響を考える立場から、17歳年長のウィリアム・ジェームズや5歳年長のモートン・プリンスによって彼の研究が多く引用されていること、また逆にジャネー自身の著作の中にもかれらの研究が例示されていることは、

19世紀後半から20世紀初頭における心理学の時代精神の一つを暗示するものであろう。

ジャンナーが1906年、すなわちコレージュ・ド・フランスの教授となって4年目にハーバードに招かれ、「ヒステリーの主要症状」(Major Symptoms of Hysteria)の講義をしていることは、今日20世紀の終りにあたってあらためて注目すべき心理学史上の一コマである。またこの3年後の1909年、クラーク大学創立20周年に際し、ウィーンのプロイトを中心とするヨーロッパの精神分析学者たちが、クラーク大学初代総長となっていたスタンレー・ホールに招待され、米国内のジェームズ、ティチェナー、キャッテル等をまじえて歴史的な学会を行ったことは広く知られているが、その3年前のジャンナーのハーバードへの招待は、当時の米国心理学界の力動的心理学への強い関心を示すものとして興味ぶかい。

ジャンナーの社会的人格論

ジャンナーによる1929年のコレージュ・ド・フランスにおける講義は「人格の心理的発達」(L'évolution psychologique de la personnalité)として公刊された¹²⁾。その第9章「愛の社会的感情」から第20章「内閉性の錯覚」に至る12の章が、社会的人格に関して講じられた。これは合計247頁に及ぶもので本書の半分以上がそれにあてられており、彼の人格概念に対する深い考察をたどることができる。広く深い講義内容の要約はきわめて難かしいが、以下、愛の社会的感情と憎悪の感情を中心に考察する。

彼によれば、人格は社会的産物であり、人間が作ったものである。アメリカの哲学者ジョサイア・ロイス (Josiah Royce) はこのことを最初に述べた。ジェームズは人格の形態のうち社会的人格に最も大きな役割を与えている。社会的人格の出発点は感情の発達である。感情は全く内的生活であり、内的感情は人間の内部に行われるすべての構成の出発点である。人格は内的構成であり、人格をはじめて構成するものは、種々なる行動に対する疲労、悲嘆、苦痛、恐怖、喜悅、悲哀の基本的感情である。人格の最初の社会的形態は感情の形態であり、社会的人格の

出発点は感情の発達である。感情は統制(内的調節作用というべきか)であり、原始的行動を一層完全に手段である。また社会的行動には協力が必要であって、そのために感情の統制というものはすべての社会的行動に加わるのである、と主張する。

スペンサーが仮定したように、人は性的現象を社会現象の出発点あるいは基礎であると信じ、それを社会的感情の出発点であると考えた。しかしジャンナーは人類や高等動物においては、性的現象が複雑であり、愛の諸形式がふんだんに存在することを指摘する。愛の感情が一次的な性的欲求によるものではなく、より高次の社会的欲求によっていることは、それが異文化間できわめて異なった形をとることからも明白である。特にジャンナーは、愛情が人々を相互に区別させるようになるという一つの普遍的な共通性を持っていることを強調する。すなわち「…社会的感情の限界は個人的愛である。それは特定の個人に対する愛である。人はついにこの個人が一人の保護者、指導者、主人、あるいは奴隷であると信じ、またそう望むようになる。このように愛は人をしだいに特殊化し個性化する」(p. 184—185)という。

憎悪と反感の感情については、まず両者の区別が示される。すなわち人は反感と憎悪の感情の全体によって相互に疎隔する。反感を理解するためには集団における人の生き方、行動の仕方を考察する必要がある。反感をもって生活することは、亡ぶこと、不健康であること、消滅と死に向かうことであり、反感中に生活する人は精神的、心理的に衰退する人である。両者ともに個人が心理的に滅亡するという意味では共通であるが、反感は相手が不在であればそれで気が休まる。しかし憎悪は記憶や想像により、相手が不在の時にもその感情が存続するという点で異なるものであって、「…憎悪の情は破壊作用である。それは単なる敬遠作用ではない。それは殺人、死滅に向う破壊作用である。…」(p. 192)とまで明言している。

ところで他者を憎むことは、一般に軽蔑されており、罪なことと考えられるので、主客を転倒させた対象化が生じる。すなわち他者が自分

を憎んでいると考える。これが被害妄想の根源である。この種の患者は敵が自分を亡ぼそうとしていると主張するが、かけ出しの医者はこれを信用する。これは全く不完全な分析であり、患者はある人を憎んでいるのであるとジャーネーはいう。このような分析は今日の力動精神医学では常識であるが、現代の粗雑で狂信的かつ破壊的な集団のテロ行為などを見るにつけ、今日もなお、ジャーネーのような深くかつ適確な観察と分析が心理学には特に必要とされているのである。

すでに述べたように、ジャーネーは、基本的に人格は社会によって構成されたものと考え、それはフロイトが生物学的立場をとったのと全く対照的である。ジャーネーは社会的立場に立って人格を説明しようとする。すなわち行動は社会への適応の過程であり、その行動はまた感情によって統制される。代表的なものとして、愛と憎悪があり、喜びと悲しみに対応する勝利の感情と敗北の感情がとり上げられる。こうした感情を基本にしてジャーネーの理論は展開され、究極的に社会的人格の本質が明らかにされるのである。

このような考え方は、未確認ながら、フロイトの生物学的立場を越えて発展した新フロイト派の社会的思想に影響を与えたことは容易に推察されるであろう。ジャーネーによれば、精神病患者と正常人は根本的には同一の心理法則に支配されるのであり、精神病患者はただ正常人よりもはっきりとその傾向を表面に現わすに過ぎない。生理心理学や臨床心理学の分野においては、その研究の進歩が実験家よりも、むしろ臨床家の見識に負うところが大きいという事情は、現代でも同様である。1930年前後におけるジャーネーの講義はわれわれにそのことを強く教示するものである。

おわりに

同時代人であり、同じくシャルコーの所で学んだフロイト（1856—1939）とジャーネー（1859—1947）を対比する時、フロイトは特に19世紀末から20世紀にかけての輝かしい業績がひろく紹介されており、よく知られている。しかしジャーネーの魅力ある力動的理論は、今日の日本の心理学界では全くといってよい程とり上げられていない。すなわち心理学の専門教育において、今日大多数の学生が利用しているテキストでも、全く欠落しているのである。これは現代の心理学教育における点検・評価の重要な側面というべきであり、先人の思想的遺産の継承を重視すべきことをあらためて強調する所以でもある。

最後にジャーネーの心理思想は何によって形成されたか。彼は自伝の結びの部分において次のように述べている¹³⁾。

「私の研究の最も興味深い部分は、私が正常な人および病人について集めてきた数多くの観察であろう。しかしもし私がこれらの研究に不可欠の哲学的思想によって導かれていなかったならば、私は決してそれらの観察を集めることも分類することもできなかったであろう。ウィリアム・ジェームズが言ったように、『人は見ようとしたもののみを見るものである』。したがって人は一定の理論、あるいは哲学的、いや宗教的でさえある興味に導かれないならば、人間の心理を研究することはできないであろう。」

ジャーネーが無数の人間心理に関する事実を見ているのは、彼がすぐれた理論家であり、哲学者であったことによるのである。このことは現代の心理学、特に臨床心理学の研究者にも人間性に対する深い哲学的思考が必要であることを示唆するものであろう。

文 献

- 1) Boring EG (1950) *A history of experimental psychology*. Appleton, New York, p700.
- 2) 今田 恵 (1962) 心理学史. 岩波書店, 東京, pp277—284.
- 3) Reuchlin M (1957) *Histoire de la Psychologie*. Presses Universitaires de France. 豊田三郎訳 (1959) 心理学の歴史. 白水社, 東京, pp65—70.
- 4) 矢田部達郎 (1950) 心理学序説. 創元社, 東京, pp129—131.

- 5) 矢田部達郎 (1942) 意志心理学史. 培風館, 東京, pp612—625.
- 6) 宮城音弥 (1977) 人間の心を探求する. 岩波書店, 東京, p24.
- 7) 宮城音弥 (1968) 人間性の心理学. 岩波書店, 東京, p171, pp199—200.
- 8) 外林大作, 辻 正三, 島津一夫, 能見義博編 (1981) 心理学辞典. 誠信書房, 東京, p512.
- 9) Ey H (1968) Pierre Janet : The man and the work. in Wolman, B. B. (ed) *Historical roots of contemporary psychology*. Harper and Row, New York, pp177—195.
- 10) 荻野恒一 (1975) ジャネ. 加藤正明, 保崎秀夫, 笠原 嘉, 宮本忠雄, 小此木啓吾編, 精神医学事典 (初版), 弘文堂, 東京, pp713—714.
- 11) 宮城音弥 (1956) ジャネ. 宮城音弥編, 岩波小辞典心理学 (初版), p78. 同 (1979) 心理学小辞典, p102.
- 12) ジャネー P 関 計夫訳 (1955) 人格の心理的発達, 慶応通信, 東京, pp163—410. (*L'évolution psychologique de la personnalité*. (1929))
- 13) 佐藤幸治, 安宅孝治編 (1975) 現代心理学の系譜 II. 岩崎学術出版社, 東京, pp 1 —18. (Murchison, C. (1930) *A History of psychology in autobiography*.)